

## 明治の『みずうみ』、民國の『茵夢湖』

——日中兩國におけるシュトルムの受容

清水賢一郎

### 一 はじめに

一九三七年、延安。とある客洞に一人のドイツ女性が訪れていた。彼女は幹部黨員として活躍していた王炳南（一九〇六一—八八）夫人で中國名を王安娜（アンナ）といい、客洞の主人は毛澤東であった。博識家として知られ、多くの書籍で溢れる毛澤東の部屋、その中にシュトルム（一八一七—八八）の短編『みずうみ』の譯書を見つけたとき、彼女はいろいろ驚いてたずねた。「多くの中國人のように、自分も『みずうみ』が大好きだ。」毛主席はそう答えたという。

一九六七年、シュトルム生誕一五〇周年の際、ドイツのテレビ・新聞で伝えられたエピソードである。毛澤東が語った如く、『みずうみ』は中國でも數多くの愛讀者を獲得してきた。郭沫若らの手で最初の翻譯單行本が世に問われて以來、中國語譯本は二〇年代だけでも三種類、四三年の巴金による翻譯を殿に、解放前の約三十年間に實に八種類の多きを數えている。巴金譯は「文革」終了後までもない七八年、上海文藝出版社の三卷本『外國短篇小説』にも收められたが、その後も數種類の新譯が現れるなど、今でも『みずうみ』は多くの中國人に

愛され續けているようである。

また我が國でも、岩波文庫版が一九五三年の初版以來、九〇年までに四十五刷を重ねていることから分かるように、「若き日のほかない戀とその後日を物語る『みずうみ』」はドイツ文學の中で最も愛讀者の多い作品の一つと言つても過言ではない。上田敏によるシュトルム詩の翻譯紹介を嚆矢として、鷗外、漱石、木下杢太郎、そして立原道造といったそうそうたる顔觸れが『みずうみ』に注目し、直接間接の影響を受けている。

ドイツ文學が詩的寫實主義の時代に入ってから出發したシュトルムは、しかし最初は敘情詩を多く書いたように、前代のロマン主義的色彩の濃い情調主義の作家であった。一八七〇年代以降は、彼も『白馬の騎士』等の寫實的作風に向かうが、シュトルムの文名を一躍高からしめたのは前期の代表作『みずうみ』である。この小説は、月光の流れる書齋に散歩から歸ってきた孤獨な老學究ラインハルトが、壁にかけたエリーザベットの肖像畫に見入るうち、青年時代の回想に沈んでゆく場面から始まる。幼なじみの二人は清らかな愛情で結ばれながら成長するが、ラインハルトが故郷を離れて大學で研究をしている間に、

彼の友人、地主で實業家のエーリヒがエリーザベトに求婚、母親の強い勧めもあつて彼女はエーリヒと結婚してしまふ。數年後、エーリヒに招かれて夫妻の住むインメン湖を訪れたラインハルトは、エーリヒの留守中、エリーザベトに再び關係の復活をほめかすが受け入れられず、湖畔の邸宅を去つてゆく。この何十年かにわたる幾つかの場面が老人の回想の中で北ドイツの自然を背景に次々と現れては消え、最後に再び、その後も孤獨を守り續けた老人の寂しい現實に戻つてくるという詩情と哀感豊かな珠玉の作品である。

本稿は、シュトルム『みずうみ』の受容を軸として、二〇年代中國における戀愛と革命の様相の一斑を明らかにせんと試みるものである。その際、日本における受容状況との比較検討を加えることにより、西洋近代文學を受容したアジアの二國における異と同一の位相を考察するための足掛かりが得られればと考へている。

## 二 日本における『みずうみ』の受容

シュトルムの作品を初めて日本に紹介したのは、おそらく上田敏である。明治三十六(一九〇三)年四月、雑誌『萬年艸』第五卷に發表された「水無月」という詩がそれである。上田敏の譯詩は明治三八(一九〇五)年十月『海潮音』としてまとめられ、日本新體詩史上に榮えある一頁を刻んだが、手放しの歡迎ばかりではなかつた。例えば夏目漱石も『海潮音』刊行に先立つ八月十五日、『新潮』誌掲載の談話筆記「水まくら」の中で新體詩攻撃を行っている。漱石はしかし新體詩全體を等し並に蔑視していたわけではなく、現に右の談話は次のように結ばれている。

然しこんなのはよい、例へば『夢の湖』といふ小説中に挿まれた

一節の詩だね。

美はしき我顔ばせも

今日のみぞたと今日のみぞ

物皆は變り果てなめ

明日こそは嗚呼明日こそは。

わがものと君を思ふも

東の閑ぞ嗚呼いつまでぞ

君にわかれ身はたゞひとり

死に果てんあはれいつこに。

同じ雑誌の中でも、是などはよほどうまいと思ふ。要するに今少しく意味のある、蘊蓄のある、しつかりした人が作家にほしいのだ。

ここで漱石の好評をかちとつたこの詩、實は『みずうみ』に挿入されたジプシー娘の歌である。つまり、漱石のいう『夢の湖』とは邦人による創作ではなく、間違ひなくシュトルム作品の翻譯であらうと想像されるのである。

『夢の湖』を掲載したのは、明治三十八年(一九〇五)八月一日發行の雑誌『神泉』創刊號である。『神泉』誌については從來不明な點が多かつたが、筆者はこのたび原資料を調査する機会に恵まれ、この『夢の湖』こそ日本における最初の『みずうみ』翻譯であると確認することができた。『神泉』誌は日露戦争後、雨後の筍のごとく發刊された雑誌のうちの一つであり、巻頭には漱石の談話筆記「現時の小説及び文章に付て」が掲げられている。そのすぐ後に配されているのが『夢の湖』なのだ。署名には「白水」とあるのみで、翻譯とは明記されていない。表紙見返しに執筆一覽から、最初の『みずうみ』邦

譯は「文學士 三浦白水」の手になるものと判明した。譯文には直接語法を間接語法に改め要約風に譯出している箇所が散見されるもの、概ね正確でありさほど問題はないと言える。問題なのは、譯出されたのが全十章より成る小説全體ではなく、わずかに「降誕祭」「歸郷」「思はぬ文」の三章のみであったということである。小説全體は「老人」と題された回想場面の章を冒頭と最後に配し、「いわば一人の孤獨な老人の感傷の底から浮かぶ青春時代の回想」という枠のなかで、幾枚ものスケッチふうな繪が積みかさねられてゆく仕組み<sup>(1)</sup>になっている。しかしこの三章では、ラインハルトが他郷の大學に學んでいる間に友人のユーリヒがユーリザベトに接近、降誕祭と歸郷の際にはラインハルトとユーリザベトは互いの氣持ちを確認しあいプロポーズさえほめかすのだが、久しぶりに届いた母からの手紙は彼女が母親の強い要求に従ってユーリヒとの結婚を承諾してしまったということとを伝えるばかりであった。いやましに高められ最高潮に達した期待と、それを一氣に突き落とす衝撃の手紙。ここには孤獨な老人ラインハルトもいなければ、いまやユーリヒの妻となったユーリザベトとのインメン湖畔での再會と葛藤、そして諦念という後半部も存在しない。あるのはただ、幼なじみで相思相愛の男女二人が、母親の言いつけに従って他に嫁がされたために起こった悲戀物語だけである。回想の枠形式を排除し、前述の三章のみを譯出することにより、譯者及びその讀者たちにとっては、淡い哀感どころではない生々しい激情が喚起されていたはずである。それは原文で單に *Ein Brief* (手紙) とある章のタイトルに「思はぬ」という形容詞が冠せられたことに端的に表れている。初めて日本に紹介された『みずうみ』は、決して牧歌的の敘情、感傷と甘さ、哀愁と諦念といったものではなく、極めて現實

的で生々しい作品として像を結んでいたと想像されるのである。

さて、『夢の湖』發表後まもない明治三十九(一九〇六)年一月の『ほととぎす』に、あたかもシュトルム『みずうみ』に似た一篇の悲戀物語が掲載された。伊藤左千夫の『野菊の墓』である。この小説に對する評論は従来少なくないが、ここでは特に、これが日露戦争とその後<sup>(2)</sup>の轉形期を背景とした作品であるという點に注意して作品分析を試みたい。それは明治日本に歐化體制としての國民國家形成、家族制度の變容ならびに産業社會化の確立がもたらされた時代であると言える。都市近郊の農村にまで貨幣經濟が浸透し、家に現金収入をもたらす存在が必要不可欠となり、文學における中心テーマも〈家〉(舊い價値體系)から〈經濟〉問題へと轉移していった。息子の結婚に際し年齢差にこだわる矢切の舊名家<sup>(3)</sup>齊藤家の政雄と、財産を重視する市川の町場者の美貌の娘<sup>(4)</sup>民子との戀愛悲劇が、そうした時代を色濃く反映しているように思われる。物語の舞台、矢切村は江戸川の東岸に位置しており、限りなく東京に近くしかも決定的に千葉であるような場所である。幼なじみの民子が大人たちの論理によって財産ある男のもとへ嫁がされることで二人の戀愛は破綻するが、それは政雄がこの中央と地方の境界の村から、東京帝國大學をその頂點とする高等教育(その終極には中央政府が控えていた)を受けるため千葉の中學へと進學してゆく間の出來事であった。『野菊の墓』は初出の三か月後には單行本化、まもなく再版されてもいるが、中央<sup>(5)</sup>明治國家體制への同化參入、市場經濟の透徹といった日露戦後の時代精神が、本書をベストセラーへと押し上げたのではなかったろうか。『野菊の墓』は、知識階級<sup>(6)</sup>の存在を可能ならしめるような資本主義の價値觀・制度の時代を、〈家〉を舞台に男女の悲戀という形をとった〈戀愛〉の問題として

問うた作品であつたと言えよう。

ところで、一般に感傷的で甘すぎると言われるこの作品を、やはり夏目漱石が「出色の文字」(明三九・一・一〇、森田草平宛書簡)と絶賛しているのは極めて興味深い。漱石は明治三十八年十二月二十九日付けの著者左千夫宛書簡では次のように書いていた。

只今ホト、ギスを讀みました。野菊の墓は名品です。自然で、淡白で、可哀想で、美しく、野趣があつて結構です。あんな小説なら何百篇よんでもよろしい。

また弟子たちに宛てた書信でも、「ホト、ギスに出た伊藤左千夫の野菊の墓といふのを讀んで御覽なさい。文章は君の氣に入らんかも知れない。然しうつくしい愉快な感じがします。」(明三八・一二・三〇、森田草平宛)「伊藤左千夫の野菊の墓といふのをよんだですか、あれは面白い。美くしい感じする。」(明三九・一・一、鈴木三重吉宛)との讀後感をもらしているが、そこに共通するのは「美しい感じ」であつた。以上は『野菊の墓』を讀んだ直後の漱石のいささか興奮を帯びた第一印象を窺わせるものであるが、それから數日後、門下の森田草平がかなり嚴しい『野菊の墓』評を書き送つたのに對し、漱石は作者に同情する立場をとり比較的詳細な批評を行っている。やや長くなるが、左に引用しておく。

只野菊に取るべき所は眞率の態度を以て作者が事件を徹頭徹尾描き出して居る點である。あれ丈の材料を普通の小説家がとり扱つたならもつと似非藝術的なものにして仕舞ふと思ふ。……それから君の非難をする箇所は一々尤もである。僕も多少さう思ふ。但し女が死んでからの一段はあれでいゝ實際です。尤も君の云ふ様にすれば死といふものに對して吾人の態度が違つてあらはれてく

る許りである。死に崇高の感を持たせやうとするときは、其方を用ゐるがよいと思ふが、死に可憐の情を持たせるのは、あれでなくてはいかぬ。野菊の行きがよりから云ふてあれでなくてはものにならない。……死は一つである。然し吾人の死に對する態度は色々ある。此態度如何で讀者の感じが違つてくる。然も其色々な態度が皆眞といふことがいへると思ふ。

ここで漱石が、民子の死を例にとり、同一の事象に對する作家の「態度」の多様な可能性、讀みの多義性を指摘し、「然も其色々な態度が皆眞といふことがいへると思ふ」と、いわば自己の小説論を披瀝している點は見逃すべきではあるまい。なるほど『野菊の墓』のように「死に可憐の情を持たせるのは、あれでなくてはいかぬ」であらう。だが『野菊の墓』に對して「あれ丈の材料を云々」という漱石は、それを日露戦後の戀愛と家、經濟、そして國家の問題を「眞率の態度を以て……徹頭徹尾描き出し」た小説として捉えていたのではあるまいか。ところで、この草平宛書簡の書かれた數か月後の明治三十九年九月、漱石は『草枕』を發表しているが、『草枕』という作品をそうした『野菊の墓』との聯關において捉え返すことが可能なのではないかと筆者は考えるのである。

『草枕』の作品世界は、一見すると、俗塵を離れた山奥の桃源郷を舞台に展開しているように見える。だが實際、小説が日露戦争を時代背景としていることは、早くも第二章、茶店の老婆の口から明らかにされている通りである。そこで老婆はさらに、那古井の温泉場で畫工の前に不思議な姿を現す志保田の嬢様、那美についても語る。聞けば「二人の男が一度に懸想し」たという。「一人は嬢様が京都へ修行に出て御出での頃御逢ひなされたので、一人はこゝの城下で隨一の物持

ちで」あったが、「御自身は是非京都の方へと御望みなさつたのを、……親ご様が無理にこちらへ取り極めて……」という経緯は極めて興味深い。つまり那美は、かつて京都で自由戀愛していたにもかかわらず、城下随一という先方の経済的條件を重視する両親の意向に「強ひられて」意にそまぬ結婚をしたのであった。彼女の結婚は相手方の「器量望み」、言い換えれば、美貌による玉の輿であったが、それは労働力や家柄でなく、女性の「美」が金銭との交換価値を持つに至った時代を物語るものと言えよう。この戀愛に勝利を収めた男の勤務先がほかならぬ銀行であったのも、貨幣經濟の浸透を象徴するものであろう。それは「岩崎や三井」が幅をきかせる時代であった。だが日露戰爭勃發により勤務先の銀行が倒産、破産したため那美は離縁されて實家に戻り、男は活路を求めて満州に渡らんとし、召集されて出征する従弟の久一同じ汽車に乗り合わせる。こうして男たちは那美のもとを去って行くのである。「草枕」とは、日露戰爭を背景に戀愛（失敗せる自由戀愛）と家、貨幣經濟、そして國家（満州進出）を、『野菊の墓』とはまた違った「美しい感じ」に描いた作品であったと言えよう。

たしかに『草枕』の描き方は『野菊の墓』とは異なるが、日露戦後の時代感覺は兩者に共有されていたのである。『草枕』發表のわずか數か月前、『野菊の墓』を評して「あれ丈の材料を普通の小説家にとり扱つたなら云々」と弟子宛の書信に書きつけたとき、漱石自身の胸中には「普通の小説家」では書けぬような、「吾人の態度が違つてあらはれ」た作品を創造し得るといふ自信がみなぎっていたに違いない。『草枕』第十二章で「普通の小説家の様な觀察點からあの女（那美―清水注）を研究したら云々」と畫工に言わせていたのも偶然ではなからう。畫工＝漱石の立場は、漱石が自己の小説でよくやるように、

冒頭部からすでに豫告されていたではなかったか。第一章には次のように書かれていた。

物は見様でどうでもなる。レオナルド、ダ、ギンチが弟子に告げた言に、あの鐘の音を聞け、鐘は一つだが、音はどうとも聞かれるとある。一人の男、一人の女も見様次第で如何様とも見立てがつく。

これが先に引用した森田草平宛書簡の「死は一つである。然し吾人の死に對する態度は色々ある」以下の言葉を髣髴とさせるものであること、もはや言うまでもなからう。

夏目漱石は、かつて絶賛した『野菊の墓』と同一の材料を異なった態度で描きだした作品として『草枕』を造形した。そしてほぼ同時期に三浦白水譯『夢の湖』をも絶賛していたのである。漱石によるシニトルム『みずうみ』評價には、自由戀愛と家、貨幣經濟、そして國家體制の問題への注目が孕まれていたのではなかったか。日本最初の『みずうみ』紹介は、そうした日露戰爭後の時代意識と緊密に結びついたものであったと言えよう。

さて、大正三（一九一四）年六月になると、日本における最初の完全な『みずうみ』翻譯單行本が刊行された。獨逸語發行所より獨逸叢書の一として出されたもので、獨和對譯方式、卷末に詳細な「註解」を附し、すぐれて教科書的な作りをしている。書名は『湖畔』、表紙には「文學士 三浦白水譯」とある。先に見た雑誌『神泉』所載『夢の湖』と同一人物の手になるものであった。奥付に記された譯者白水の本名は三浦吉兵衛。明治十年二月十八日宮城縣桃生郡小野村に生まれ、同三十八年東京帝大文科を卒業。『湖畔』刊行當時は一高教授の任にあった。『夢の湖』發表は卒業後まもない熊本の高教授時代、

それを今回完全な形に譯し直したのであり、『みずうみ』に對する譯者の愛着が窺われるが、譯文もかなり正確で流麗なものに改められている。だが九年の歲月をへて變化したのは譯文ばかりではなかつた。それは本書の解題にあたる巻末の「Theodor Storm 小傳」に如實に反映されている。小傳前半の傳記部分わずか十行の中で、「故郷」という語の使用が實に五回の多きに登っているのである。白水はさらに「Die Heimatstadt 故郷」という詩の原文とその譯さへ巻末に収録していた。日露戦争時代における『みずうみ』紹介に際し回想の枠形式を排除して現實の悲戀物語とした同じ譯者の手によつて、今やシュトルムは「郷愁」の詩人へと變貌を遂げたのだと言えよう。『みずうみ』は幼年時代や青春の甘美な追憶として讀まれたのである。ここでは〈家〉の問題が脱落しているが、その背景には、日露戦後十年で核家族化の趨勢が搖るぎなきまでに進行したことばかりでなく、『湖畔』讀者層における故郷喪失をも指摘できよう。本書の讀者は主として舊制高校の學生と想像されるが、日露以來約十年のあいだ急速に中央集權化が進む中、故郷を捨てて『帝都』東京に入り國家官僚となつていったのが、ほかならぬ彼ら學生であつた。知的中間階級が續々と都市に移住し國家中央に入つていったとき、故郷喪失はそのまま國家への組み込みとなる。彼自身宮城縣から高等教育のため上京、當時一高教授の任にあつた三浦白水は『みずうみ』を『湖畔』として改めて世に問う際、家・國家の問題に「führendな Stimmung (心を打つ情調)」を流し込み、郷愁の文學へと轉調させたのだと言えよう。

その後の日本における『みずうみ』の運命は、現代の我々にも馴染み深いものとなつていく。牧歌的敘情と感傷的甘さ、寂寞と哀愁。はかない人世、諦念と無常觀……。とりわけ第二次大戦における敗戦

後、諦念と無常觀が『みずうみ』の基調と見做されるようになっていく。いつぼう、婦人・女學生雜誌に竹久夢二風の挿畫を伴つて紹介され人氣を呼んだという現象は興味深い。ともあれ、大正時代に入つて間もなくシュトルムは「郷愁」の詩人へと變貌し、『みずうみ』に對するいわば社會的視點は日本の讀者から急速に忘れ去られていくのであつた。

### 三 『みずうみ』と一九二〇年代中國

中國における最初の『みずうみ』翻譯單行本は、日本留學中の郭沫若及びその學友錢君胥の手によつて世に送られた。<sup>(補註)</sup>はじめ錢君胥が舊時の平話小説の文體で意譯したものを、原著の風格を失しているとして郭沫若が直譯體(語體文)に改めたというが、一九二一年七月一日、上海の泰東圖書局より『茵夢湖』のタイトルで出版されるや、翌八月には早くも再版され、二三年十月には改版第六版、三一年十一月までに十四版を重ねるベストセラーとなつたのである。また郭・錢共譯『茵夢湖』は二七年九月には「世界名著選」の一冊として創造社出版部より改めて刊行された。再版以下は光華書局に引き繼がれ、こちらも三三年までに六版を重ねている。人氣のほどが窺われよう。

また、二二年二月に商務印書館より唐性天譯『意門湖』が、二七年十一月には『滄溟湖』のタイトルで開明書店版(朱俊譯)が出され、それぞれ數版を重ねて多くの愛讀者を獲得している。なかでも郭沫若らによる初譯が世に出て間もなく、茅盾・鄭振鐸ら文學研究會の肝煎りて出版された唐性天譯『意門湖』は、創造社と文學研究會との對立もからみ、互いの誤譯をめぐり翻譯論争を引き起こすという一幕も見られたのである。

さて、『みずうみ』の引き起こした反響は単に翻譯の方面に限られるものではなかった。いったん郭沫若らによる翻譯が出版されるや、わずか数カ月の内に讀後感や批評が續々と新聞紙上を賑わしたのである。その引き金となったのは佛突(陳望道)の「讀了『茵夢湖』」で、二二年七月一日、上海『民國日報』副刊の『覺悟』に掲載された。これは『みずうみ』に挿まれた詩二首を引きつつ紹介を行ったものであったが、早くも五日後にはこれに應える文書が書かれている。同月十日の同紙に掲載された『茵夢湖』之印象批評<sup>①</sup>がそれで、その中で筆者の有長はまず譯文の藝術性を評價、續けて小説の敘述に從い感想を記していき、ラインハルトの失戀場面を讀むに至り「一種沈鬱なる悲哀が襲うのを覺えさせ」られたと書いている。だが有長の筆は、單なる悲哀への共感を超えて突き進んでいくのである。

ラインハルトとエリーザベト二人の愛情は、極めて眞摯で強いものだったと言えるのに、しかしなぜ最後に失敗してしまったのか？ 以下の答えを得ることができよう。(一)ラインハルトの愛情が移ろったのか？(二)エリーザベトの氣持が變わったのか？(三)ラインハルト或いはエリーザベトが家庭に阻害されたのだからか？ そうだ、最後の一つにエリーザベトは不幸にもぶつかってしまったのだ。

ここでは悲戀に同情するばかりでなく、その原因を追及し、それを家庭の阻害に求めているのである。日本ではまず見られぬこうした激しい論調は、しかしこの一篇にとどまらなかつた。十月一日、同じ『民國日報』副刊の一つで復旦大學學生の手になる『平民』誌に掲載された余愉の詩「讀『茵夢湖』」には次のような一節が見られる。

これは昔お母さんがお父さんに嫁いだのとは違ふのよ、

私たち娘の結婚に何の口出しをしようというの？

『みずうみ』原作には一切登場せぬエリーザベトの父が出現させ、親の世代における舊式の結婚というブレ・ストーリーさえ構成している點、極めて印象的である。

ところで、前にあげた有長「『茵夢湖』之印象批評」は次のように續けていた。

ああ、萬惡(惡逆非道の意)の家庭よ！ おまえは幾多の青年男女を陥れたことか！ ああ、憐れな女性よ！ おまえたちは萬惡の家庭の束縛を打ち破り自分たちの最高の意志を實現させるべく自由戀愛する勇氣を持っていると言えるか？ 『茵夢湖』のような悲劇が、世界でもはや一度と演じられぬことを祈るばかりだ！

『みずうみ』に對するこうした方向性と激しさをもった反應は、我々の眼にはいささか奇異なものと映るかも知れない。しかし例え、文中に繰り返し出現する「萬惡の家庭」なる言説は、まさに激烈な封建的舊家庭<sup>②</sup>大家族制度批判を行った五四新文化運動の時代に屬するものであり、そもそもこの『茵夢湖』評を掲載した『覺悟』自體、この時期「婚制の罪惡」といった文字で溢れていたのであつた。例えば、陳望道による最初の紹介記事のすぐ下には「婚制の罪惡の一斑」なる文章が掲載され、「父母之命、媒妁之言」による包辦婚姻(親の言いつけによる結婚)の批判を行っていた。また翌七月二日、初めて『民國日報』に『茵夢湖』出版の廣告が出た時も、同じ紙面に「婚制の罪惡感」に關する二通の手紙<sup>③</sup>が載るといった調子である。しかもその一通目は、縁談のために最近夭折した妹を悲しむ友人「曉風」に宛てられたものであつたが、その曉風とは他ならぬ陳望道の筆名の一つであつた。『茵夢湖』紹介の数日前、陳望道自身、結婚制度のために

犠牲となった妹の死をその眼に焼きつけていたのである。

こうした包辦婚姻の否定と自由戀愛の主張は五四時期の若き知識人たちの主要な問題關心の一つであったが、その自由戀愛の象徴となつたのはイブセン（一八一—一九〇六）作『人形の家』の主人公ノラである。中國におけるイブセンの紹介は日本留學中の魯迅によるものをもつてその嚆矢とするが、ノラが一躍時代のヒロインとなつたのは、一九一八年六月の『新青年』イブセン特集號における胡適による紹介以後のことである。胡適はこの特集號において羅家倫と共譯で『人形の家』を譯載する一方、卷頭論文「易卜生主義」を寄せているが、彼らの「注意するイブセンは、決して藝術家のイブセンではなく、社會改革家のイブセンで」あつた。彼にとつてはノラもそうした文脈で捉えられ、二二年六月三日の日記では「決然と家から脱出する」ノラこそ「革命家」であり「社會革新家」なのだと思つてゐる。胡適はさらに『遊戲的喜劇 終身大事』を書き、そのヒロイン田亞梅女史に自己のノラ像を結晶させていた。彼女は迷信と儒教道德を代表する兩親に反抗し、迎へにきた戀人とともに封建的（家）を飛び出すのである。魯迅も『Ibsen の流れを汲んだ戯曲『終身大事』云々』と語つてゐるように、當時の知識人たちは田女史を「中國のノラ」と捉へていたのであるが、その根據はおそらく、ヒロインの「家出」（中國語「出走」）という現象にこそ存すると思はれる。かくて出走＝舊家庭への反逆がノラだと認識されるに至つたのであろう。そうした言説を當時の文獻から拾ひ出すことは造作もないが、例えばあの陳望道も「婦女問題的新文學」と題する文章で「人形の家」を脱出しようと思ふもの」に對し、胡適らによる『人形の家』翻譯を讀むよう勸めていた。このように『覺悟』誌を舞臺に女性解放の論陣をはる陳望道は、一方で『人

形の家』を喧傳すると同時に『みずうみ』にも深い同情を寄せていたのであつたが、それは決して偶然ではなかつたように思われる。自由戀愛の實現をめざして決然と兩親に反逆、「出走」していった「女性英雄」ノラと、母親の言いつけに忍従することにより悲戀の涙を落とすエリーザベトとは、同一の問題に對する對照的な道を示していると思へられるからである。イブセン熱に沸く二〇年代初頭、たちまちベストセラーとなつた『みずうみ』は、『人形の家』の「陰畫」だったのであり、それゆゑ當時の知識人たちに同一の期待視野で讀まれていたのであろう。

ところで、革命家＝社會革新家として紹介され、二〇年代中國の「革命の天使」となつたノラ＝田亞梅女史は『終身大事』結末で、迎へにきた戀人の陳先生の自動車に乗り込みさつそうと封建的（家）を後にした。北京が壓倒的に人力車の町であつた當時、稀少な存在であつた自動車が登場するのは何故であるうか。この問題については藤井省三氏が次のように述べている。

線路も時刻表もない自動車は、アメリカ國民に空閒と時間の支配權を與へ、個人主義の傾向に拍車をかけ、核家族化を促進したと言われる。このようなアメリカを胡適は「自動車の國家」と評した。……陳さんと田嬢が手を取り合つて進んでいく未來の中國を、胡適はアメリカ的個人主義の原理に據つて立つ共和國として思ひ描いていたのであろう。

母と父に代表される迷信と儒教道德に反抗し自由戀愛を追求する若き二人を乗せて輕やかに走り去る『終身大事』の自動車——それはまさに新しき民國＝共和國建設の夢を象徴するものだったのである。さればこそ、そうした光明に満ちた「革命の天使」ノラの「陰畫」ともい



うべき『茵夢湖』に對して、少年中國の若き知識人が次のような激しい詩を作つて和していたのであらう。

誰が言ったのか天の下 愛し合うものはみな結ばれると？

これほどわかりきつた君と僕が、

こんな悲しい結果になるなんて！

これからは、

僕はもう結婚など夢見たりはしない、

望むのはただこの苦痛を造り出している制度を打ち破ることだ

けだ！

愛し合う若い二人が母親の言いつけによつて無残にも引き裂かれるのを眼にしたとき、この詩の作者は二人の悲痛なる想いに同情するばかりでなく、かえつて「この苦痛を造り出している制度を打ち破らんと、社會改革＝革命の誓いを叫んでいるのである。『みずうみ』のとき悲戀を再演せぬためには、萬惡の家庭の束縛を打破すべく、勇氣をもつて自由戀愛せねばならぬ。自由戀愛實現のためには舊き社會制度を打破し、新しき國家體制＝眞の共和國（民國中國）建設を指す。戀愛のために社會改革を、革命のために自由戀愛を……。二〇年代初めの若き知識人たちにとり、戀愛と革命とは同時に追求されるべき相即的な理想の目標であつたと言えよう。

『みずうみ』に戀愛と革命を讀み込む上述のような反應は、しかし讀者の側の「讀み」の問題とばかりは言えぬように思われる。というのは、郭沫若ら譯者の意圖がすでにそうした方向性を有していた形跡が認められるからである。

包辦婚姻の否定と自由戀愛の追求については比較的理屈し易いと思われるが、一つだけ資料をあげておきたい。それは共譯者の錢君胥自

身による回想である。

彼「郭沫若」は「この本は高尚な愛情を表現している」と言った。あるとき、彼は私の譯した書中の女主人公エリーザベットの口ずさむ詩「母はのぞみぬ君ならで、あだし男に添えかしの、ひそかに傷むわが心」を眼にしたいへん興味をひかれ、その後、この詩は彼が博多灣の濱邊を散歩するおり朗誦するところとなつた。彼はこう言った。「なんでもない言葉の中に、眞の情感が描き出されてゐる」と。

錢君胥は、郭沫若が「高尚な愛情」に注目し、包辦婚姻の悲痛を訴えるものといふべき詩の中に「眞實の情感」を感じ取つていたことを傳えている。しかもここには一つ、實に興味深い記憶違ひがあつた。「母はのぞみぬ……」の詩を、エリーザベトが口にしたとしてゐるのである。實際はラインホルトが自分で蒐集した民謡を朗讀したのであるが、自由戀愛の破綻に對する同情がそれを憐れむべき女性の眞實の肉聲と錯覺させたものと想像されよう。

また、郭・錢共譯『茵夢湖』巻頭には「原著者小傳」が掲げられているが、これは三浦白水による最初の邦譯單行本『湖畔』巻末の「Theodor Storm 小傳」と極めて類似しており、比較検討を施すに値するものである。兩者の全文は次の通りである。

#### Theodor Storm 小傳

Theodor Storm は 1817 Schleswig 州の Husum 市に生れ、1842 故郷に於いて辯護士となつた。然るに其頃 Schleswig 州は未だ Dänemark の領地で Storm の獨逸員質は時の官憲の忌む所となり、彼は 1853 故郷を見棄てて Preussen の官吏となつた。斯くして Potsdam 及び Heiligenstadt に客寓すること十年彼は夢に

も霧深き北海の故郷 (Graue Stadt am Meer) を詠れることが出来なかつたが、其後幸にして Schleswig-Holstein の二州が獨逸の國に併合せられたので、1864 再び故郷に歸へることが出来た。其れから 1888 七十餘歳の高齡を以て此世を去るに至る迄彼は再び故郷を見棄てなかつた。Storm は敘情詩に於いて優に一家の風格を備へて居るのみで無く、其著作の中には單篇長篇許多の小説を含んで居る。Immensee は彼の作中最も人口に膾炙して居るもので、其藝術上の價値に就いては批評家の中に多少の異論もあるやうであるが、一篇を貫く ruhend な Stimmung に至つては流石に棄て難い一種の趣を備へて居り、且つ作者が此書に對して忘れ難い特殊の執着をもつて居たことは彼が七十の賀をやつた時其紀念として此書の edition de luxe を出したのでもわかる。

## 原著者小傳

施篤謨氏 (Theodor Storm) 德之雪婁斯維州 (Schleswig) 虎汝謨 (Husum) 市人、生於一八一七年。一八四二年爲律師。時該州尙屬丹麥、施之親德、爲當局所不容、遂於一八五三年出仕普魯士。凡流寓卜支丹 (Potsdam) 及海立西斯他脫 (Heilsstadt) 十年、其所作「故郷」(Die Heimatstadt) 憶雪州也。迨雪州歸德後、以一八六四年重返故里、時年已四十有八。一八八八年終於鄉。其所作詩、長於敘情、自成一家；所作小説、流麗眞摯、莫不一往情深、

「茵夢湖」(Immensee) 一作、尤膾炙人口云。

敘述の流れといふその内容といふ、兩者の酷似は一見して明らかである。一九一四年、一高特設豫科時代からの學友、郭・錢の二人が『みづうみ』翻譯作業を進める際、一四年六月に發行され、時の一高教授三浦吉兵衛の手になる當時唯一の日本語譯本を参照した蓋然性は

極めて高いように思われる。

さて、かくも酷似した二篇の小傳であるが、その比較検討は兩者の翻譯意圖の微妙な相違を浮き彫りにしてくれる。中國語版小傳からは總じて日本語版の一部を削除する傾向が窺われ、後半部の「其藝術上の價値に就いては……異論もあるやうである云々」及び末尾の「七十の賀」を記念した豪華版のエピソードが削除されていることがまず目につく。また日本語版に氾濫する「故郷」という語も、中國語版ではぐっと削減されていることに氣づかれよう。しかし問題は量的減少ではなく質的變異にある。例えば、日本語版で繰り返される「故郷を見棄て」の語は、當時、故郷を飛び出し中央に入つていった知識階級の故郷喪失感覺を表出するものと捉えられるが、それが中國語版ではいづれもカットされている點は興味深い。さらにこの二つの小傳を詳細に比較すると微妙な差異が浮かび上がってくる。シュトルム逝去に關し日本語版では記されている「七十餘歳の高齡を以て」の語が削除された一方、もともと日本語版には見られぬ一八六四年の歸郷時の年齡、「時に年すでに四十八であつた」が中國語版で付け加えられているのである。この時の歸郷については日中兩文ともにシュレスヴィヒ州がドイツ領となつたためと記しているが、日本語の「併合」と比べた場合、中國語版の「歸」はやはり本來あるべき理想状態への復歸というニュアンスが強いであろう。さればこそ、當時まだデンマーク統治下にあつたシュトルムの生地を説明する際、「ドイツのシュレスヴィヒ州」ともドイツ領であつたかのごとく傍點部を書き加えたのであるまいか。さらに、續く「シュトルムの親ドイツ的態度は、當局に容れられず」なる記述も（日本語版に準じたものとはいへ）いささか正確さを缺く。確かにシュトルムはデンマークとの紛争が始まつた一八四

八年には反デンマーク主義の「愛國應援同盟」書記をつとめ、獨立派臨時政府の機關紙に健筆をふるつてもいた。<sup>③</sup>だが、彼の反デンマーク的態度はシュレスヴィヒの自主獨立の願いにこそ根ざしたものであり、決して「親ドイツ的」であつたわけではない。シュレスヴィヒ地方の政治的變動を追うことにより、シュトルムと故郷の關係を明らかにした松井勳氏は次のように述べている。

シュトルムがドイツ對デンマークの圖式で事態を見てはいないことに注意する必要がある。彼の頭にあるのはあくまでシュレスヴィヒ・ホルシュタインであり、當時ドイツという統一國家はまだ成立していない。……シュトルムは廣くドイツを稱える愛國者ではない。自主獨立のシュレスヴィヒ・ホルシュタインが成立したあと、それが統一されたドイツの一環となることを、彼は望んでいたのである。<sup>④</sup>

これに對し郭沫若らは「ドイツという統一國家」の誕生をこそ念頭に置いていたのではなかつたか。植民地化の危機に瀕し、國家統一の問題を日常として生きていた郭沫若ら自身のシュトルムに共通した想いが、彼らをして反デンマーク戦争開始の翌年に書かれた『みづうみ』翻譯の筆を執らしめ、意識的或いは無意識的に二篇の小傳に微妙な差異を生じさせたのであろう。中國語版に書き添えられた「時に年すでに四十八であつた」なる語句からは、待望久しき統一された國民國家の實現をようやくにして目の當たりにした老知識人への無限の同情が窺われる。シュトルムの故郷シュレスヴィヒ地方は、決して單なるノスタルジーの對象ではなく、國民國家建設の一大係争地だったのである。大正三（一九一四）年以後、日本で『郷愁』の詩人シュトルムという評價が固定化していったのに對し、二〇年代初頭の中國における

『みづうみ』は、自由戀愛と國民國家建設（『戀愛と革命』）の物語として數知れぬ若き知識人を魅了していたのだと言えよう。

#### 四 結 び

一九二五年三月五日、ある若き革命家が靜かに息をひきとつた。北京大學マルクス學說研究會や北京共產主義小組の發起人の一人で、四年の國民黨第一回全國大會には毛澤東らとともに參加、國共合作實現のために奔走していた高君宇（一八九六—一九二五）である。結核に斃れたこの夭折の革命家が死の床で口ずさんだのが、夏目漱石も絶賛したあのジプシー娘の歌であつたことを、彼の戀人で作家の石評梅（一九〇一—二八）が傳えている。

歸り道、來た時の私の足跡はすでに雪にかき消されていた。うつろな私の心に、天辛「高君宇の筆名—清水注」が病床で『茵夢湖』を口ずさんだことがふと蘇つた。

「死ぬ時よ！死ぬる時、わたしはただひとり荒れたる丘に葬らるるのみ！」<sup>⑤</sup>

石評梅の親友、廬隱が高君宇と石評梅の二人をモデルに書いた長編『象牙戒指』の十三章にも『みづうみ』は登場する。だが、作家である石評梅・廬隱が名作文學を讀んでいるというのならともかく、革命家である高君宇までが『みづうみ』の一節を暗唱しているというのは、いささか奇異な印象を與えるかもしれない。これは本稿冒頭で紹介した毛澤東のエピソードについても同じであらう。その毛澤東の逸話を日本に傳えた高橋健二氏自身、シュトルムと毛澤東という「および最も縁遠い……二人が結びつくということは考えられなかつた」と率直な感想を漏らしている。

なるほど、作者自身「ドイツ文學の眞珠」、「純粹な愛の物語」と評した『みずうみ』と、大中國の偉大なる革命家毛澤東との結びつきには、いささか困惑させられるむきも少なくなかろう。毛澤東によるシユトルム愛好の理由として、王安ナ女史は、シユトルムの風景描寫が氣に入っているようだ、と答えていた。自身すぐれた詩人でもある毛澤東が、自然感の豊かな敘情詩人シユトルムに共感を寄せたとしてみても不思議はない、と。

だが、ひとたび二〇年代中國における『みずうみ』受容へと廻行すれば、こうした解釋はいささかその「歴史性」を見失つたものと言わざるを得ぬことに氣づくはずである。

イブセン熱に沸く二〇年代初頭、「革命の天使」ノラの「陰書」として『みずうみ』はたちまちベストセラーとなつた。當時、國民國家の文化的枠組み作りに着々と取り組んでいた胡適が「人形の家」のノラを自由戀愛と共和國建設のドラマと讀んでいたように、胡適を中心に渦巻いていた新文化運動に携わる青年たちの多くは、『みずうみ』の中にも戀愛と革命を讀み込んでいたのである。

例えば巴金である。一九二七年、フランス行き船中の體驗を綴つた『海行雜記』によれば、甲板で讀書中、彼は『みずうみ』の世界語譯本を落としてしまつたが、インド洋中に舞い落ちたその本は、ちょうどジプシー娘の歌の書かれたページを開いており、その最後の二句はいつまでも彼の眼前にたゆたうたという。渡佛後、巴金は小説を執筆。『小説月報』に發表されたその小説により、彼は一躍職業作家として立つことになるが、『滅亡』と題されたその小説には、インド洋中の『みずうみ』が影を落としているように思われる。幼少年時代の回想場面における断片的エピソードの積み重ねといった構成面の類

似、幼なじみの従妹との初戀がいわゆる包辦婚姻によって破綻する點、そして愛する女性との別離とそれによる主人公の精神的な愛の成就といったモチーフは兩者に共通するものであろう。ただ『滅亡』の主人公が『みずうみ』と決定的に異なるのは、精神的な愛の永遠性獲得と同時に、革命へと身を投じていく點である。ここにおいても、戀愛と革命とは同時追求される相即的な理想目標となつてゐることが窺えよう。むろん、毛澤東もこうした歴史的社会的文脈を共有してゐたものと想像される。二〇年代中國における『みずうみ』は、美しい自然描寫に溢れた淡く甘美な戀の物語でも、過ぎ去つた青春や故郷を懐かしむ諦念の詩でもなかつたのである。

以上見てきたように、二〇年代中國における『みずうみ』は戀愛と革命の物語として多くの若き知識人たちを魅了したのである。だが八〇年代には『施篤姆詩意小説選』『茵夢湖：施托姆抒情小説選』が相次いで出版されるなど、人々の注目はシユトルム短編小説の抒情性に集まつている。それは第一次大戦後の日本でシユトルムが「郷愁」の詩人と捉えられていた状況と類似するものと言えよう。しかし翻つてみるに、日露戦後の日本においては、戀愛と經濟、そして國家體制といった視點から『みずうみ』が捉えられていたのであり、日本と中國における『みずうみ』受容過程には、時間的差異こそ存在すれ、いわば相同な構造が見出せるのではなからうか。

注(一) 王安ナ『革命中國に嫁いで』篠原正瑛譯、平凡社、一九七五。

(二) Thoms, Ludwig, "Auch Mao Tse-tung liebt 'Imnensee'." Sonderbeilage der "Husumer Nachrichten" 14. Sept. 1967. また高橋健二『作家の生き方』讀賣新聞社、一九七二参照。のち「シユトルム

ム・毛澤東・ツルゲーネフ」として日本シュトルム協會編『シュトルム文學論集』三修社、一九八九にも收録。

(3) 以下、『みずうみ』中譯本については主として次を参照。楊武能「施篤姆の詩意小説及其在中國之影響」『外國文學研究』一九八六年第四期。北京圖書館編『民國時期總書目・外國文學』書目文獻出版社、一九八七。

(4) その他、英漢對照本も數種存在する。張友松譯注（北新書局、一九三〇）、陳双鈞譯（奧付なし。北京大學圖書館所藏）の二點は確認済。ちなみに、唐致『晦庵書話』（生活・讀書・新知三聯書店、一九八〇）所收『茵夢湖』には北新書局より羅牧譯の英漢對照本が出版されていたと回想されており、唯明「談茵夢湖在中國の幾種版本」『中國新書月報』第一卷第十・十一合併號、一九三一・十二には「英文譯本有中文注釋者」として周越然選註『蜂湖』（商務印書館、英文學生叢書之一）をあげているが、ともに未確認。

(5) 岩波文庫『みずうみ』（關泰祐譯、一九七九改版）表紙カバーより。

(6) 日本におけるシュトルム受容に關しては、以下の諸文獻を参照。平川祐弘「西洋敘情詩の一波動」『國文學 解釋と鑑賞』第三三卷第八號（至文堂、一九六八）。岡田朝雄「シュトルム」『歐米作家と日本近代文學』第四卷「ドイツ篇」教育出版センター、一九七五。田中宏幸「日本におけるシュトルム文學」『シュトルム文學論集』三修社、一九八九。宮内芳明編「書誌 日本におけるテオドール・シュトルム：研究と翻譯」『ドイツ文學』第八一號（日本獨文學會、一九八八）。

(7) 『神泉』については野村傳四「神泉」『漱石全集・月報』第十八號（一九三七）が書かれている以外、注（6）の諸文獻はいずれも不詳としている。東北大學漱石文庫をはじめ公共圖書館等に所藏されていないのが原因と思われるが、筆者はこのたび岩波書店全集資料室に保管されている該雜誌（創刊號のみ）を閲覽することができた。特に許可された同社全集係中村寛夫氏の特別の御厚意に感謝する。

明治の『みずうみ』、民國の『茵夢湖』

(8) 博文館『太陽』第十一卷第十四號「文藝時評」欄所載「文藝だより」参照。なお『神泉』創刊號については『帝國文學』第十一卷第九號に詳細な紹介記事があるほか、明治三八年八月二日と九月三日の『讀賣新聞』にそれぞれ創刊號・第二號の廣告が掲載されているが、第三號が發刊されたか否かは未詳。

(9) 前掲岩波文庫『みずうみ』の「道のべに立つおとめこの」故郷」「手紙」の三章に相當。

(10) 旺文社文庫『みずうみ・三色すみれ』（石丸靜夫譯、一九六六）解説。深見茂氏は、西歐における教養小説の系譜に位置づけることにより『みずうみ』を一種のイニシェーション・ノヴェレと捉える劃期的視點を提出している（『みずうみ』における教育小説の殘像）前掲『シュトルム文學論集』所收。その視點からはインメン湖の場面で物語は決定的轉換點を迎え、教育小説としては物語後半部にむしる重點が置かれることになるのが興味深い。

(12) 『みずうみ』と『野菊の墓』の類似については小松伸六「シュトルムと私」（前掲旺文社文庫所收）、石丸靜夫『愛の孤獨について』（沖積舎、一九八五）等に指摘があるが、詳細な比較研究は従來行われていないようである。

(13) 明治三九年一月八日、森田草平宛。

(14) 小説の第九章、書工はメレディスの『ピーチャムの生涯』を讀んでみせるが、それは英國の名門出身の若い海軍士官ネビル・ピーチャムとフランスの少女ルネーとの悲戀を描いた小説であり、「男は黒き夜を見上げながら、強ひられたる結婚の淵より、是非に女を救ひ出さんと思ひ定めた」なる一節が引用されていたのは示唆的である。

(15) 参照 井上章一『美人論』リポート、一九九一。

(16) 『草枕』第十章。

(17) 『帝國大學出身名鑑』一九三二。

- (18) 前掲注(7)野村傳四「神泉」を参照。
- (19) 三浦白水譯『湖畔』卷末「Theodor Storm 小傳」より。全文を本稿第三章に収録しているので参照されたい。
- (20) 前掲注(6)宮内書誌を参照。
- (21) 以上については次の二篇を参照。錢潮口述・盛巽昌記録整理「回憶沫若早年在日本的學習生活」『中國現代文藝資料叢刊』第四輯、上海文藝出版社、一九七九。「茵夢湖」六版改版的序」及びその注釋(郭沫若集外序跋集)四川人民出版社、一九八三、所收。
- (22) 唐性天譯「意門湖」は、『小説月報』第十二卷第八期卷末の附録「文學研究會叢書目錄」に「意門湖 德國史東著 唐性天譯」とあり、文學研究會機關紙『時事新報』副刊『文學旬刊』第三六期「新刊介紹」欄でも紹介されている。これに對し郭沫若が「批判『意門湖』譯本及其他」(『創造』第一卷第二期)を突きつけ、鄭振鐸がこれに答え(西諦「通訊(沫若兄)」『文學旬刊』第四八期)論争の幕が切って落とされ、厚生(成仿吾)「校茵夢湖談到翻譯」(『日出』第二期)等が續々と書かれた。『茵夢湖』對『意門湖』の翻譯論争については、本稿ではひとまず措く。
- (23) 管見に入ったもののうち、一九二一年に發表されたものを次に掲げる。①佛突「讀了『茵夢湖』(隨感錄)」『覺悟』七月一日(のち『陳望道文集』第一卷に収録)②有是「茵夢湖」之印象批評『覺悟』七月十日③陳德徵「讀了茵夢湖以後」(詩)『覺悟』七月五日④沈松泉「讀了『茵夢湖』」(詩)『平民』第七二號、七月三〇日⑤余倫「讀『茵夢湖』」(詩)『平民』第七一號、十月一日⑥郁達夫「茵夢湖的序引」『文學旬刊』第五期、十月一日⑦枝榮「讀茵夢湖」『覺悟』十一月八日
- (24) 曉風「婚制底罪惡底悲感」『覺悟』一九二一年六月二十八日。のち『陳望道文集』第一卷に収録。
- (25) 中國におけるイブセン受容については、筆者は修士論文「中國におけるイブセンの受容：胡適・魯迅を中心として」(未發表)において論じている。
- (26) 『新青年』第六卷第三號「通信」欄。
- (27) 『胡適的日記』中華書局香港分局、一九八五。
- (28) 『新青年』第六卷第三號(一九一九)。
- (29) 『奔流』編校後記(一九二八)『魯迅全集』人民文學出版社、一九八一、「集外集」所收。
- (30) 一九二〇年八月二日『覺悟』。署名は佛突。『陳望道文集』第一卷所收。
- (31) 曹聚仁「再看『娜拉』」『人事新語』香港益群出版社、一九六三。
- (32) ただし、英雄的なノラよりは、悲慘な結末を迎える『みずうみ』の方が、當時にあつてはよりリアルであつたと想像される。茅盾の指摘した二一年六月頃の悲戀小説の爆發的流行(評四、五、六月的創作)『茅盾全集』第十八卷所收)はそれを物語るものであろう。なお、日露戦争後の日本で『みずうみ』を絶賛した夏目漱石が『草枕』結末でイブセンに言及している(「個人の革命……云々」)のも極めて示唆的である。
- (33) 袁振英「易卜生傳」『新青年』第四卷第六號(一九一八)。
- (34) Strand, David, "Rickshaw Beijing" (University of California Press, Berkeley, 1989)
- (35) 藤井省三「鉛筆の戀愛、自動車の共和國」『ユリイカ』一九九一年十二月號。
- (36) 前掲注(23)の③陳德徵より。
- (37) 前掲注(21)の錢潮口述記録参照。
- (38) 大正三年の三浦白水譯『湖畔』に續く『みずうみ』の翻譯は、牧山正彦譯「インメン湖」であり、ゴットフリッド・ケルレル作『村のロマエとユリア』新潮社、一九二一年八月十三日發行に附録として收められたものであつたが、その解説にシュトルムには「既に二三の邦譯もあり云

々」と書かれている。しかし、その邦譯の存在は現在のところ確認されてはいない。

- (39) 前掲注(22)の翻譯論争中、郭沫若からの批判に答えて鄭振鐸が「我々の手元には英譯本もないし、注釋完備の獨和對譯本も目にしていない」(西諦「通訊」沫若日記)と言ひ譯を述べている。これは逆に、郭沫若らが「注釋完備の獨和對譯本」を参照していたことを傍證するものと言えよう。

- (40) シュトルムの傳記については、前掲注(2)の高橋健二「作家の生き方」及び「シュトルム文學論集」巻末の年表「シュトルムの生涯と作品」を参照。

- (41) 松井勲「シュトルムと故郷」(十九世紀ドイツ文學研究會編『ドイツ近代小説の展開』郁文堂、一九八八)

- (42) 「我只合獨葬荒丘」『石評梅作品集(散文)』書目文獻出版社、一九八三。

- (43) 謝韵梅『茵夢湖』與『象牙戒指』『中國現代文學研究叢刊』一九九〇年第二期を参照。

- (44) 前掲岩波文庫『みずうみ』解説。

- (45) 以上、前掲注(2)に同じ。

- (46) 巴金「印度洋中的『茵夢湖』」より。なお、この體験が四三年の巴金譯「蜂湖」の「後記」で觸れられていない點は興味深い問題と言えよう。
- (47) なお、インド洋中で開かれたページにあったジプシー娘の歌の最後、「死、殉、死、我應當沒有你」の二句は、「滅亡」と題されたこの小説の全體的モチーフと關わるように思われるが、これについては稿を改めて述べたい。

- (48) 毛澤東、高君宇のほかにも、例えば最初に『みずうみ』を批評した陳望道が、二〇〇年、中國で最初に『共產黨宣言』を翻譯出版している點は示唆的である。

明治の『みずうみ』、民國の『茵夢湖』

- (49) それぞれ、前者は楊武能譯、江蘇人民出版社、一九八四。後者は叶文・劉德中譯、上海譯文出版社、一九八七。こうした抒情性への注目はしかし、實は早くも三〇年代から見られる。三〇年代中國における『みずうみ』受容については別稿にて論じることとしたい。

- (50) 「相同」ということはしかし、共通點のみでなく、相違點も存在するということである。それは具體的には、日露戦後の日本で伊藤左千夫、夏目漱石等によつて鋭くとりあげられていた貨幣經濟Ⅱ市場經濟の問題が、中國の場合はほとんど注意されていない點等に明瞭に表れている。こうした問題については、機會を改めてさらに検討していくこととした。

- (補註1) 筆者は一九九一年九月より一年間の中國留學中、郭沫若らによる單行本出版以前に行われた『みずうみ』翻譯の試み、『隱媚湖』(留美學季報)第三年第三號、一九一六・九、上海圖書館藏)を閱覽する機會を得た。署名には「德人斯託蒙著／中國之盜譯」(之盜については未詳)とあり、文言文によるものではあるが譯文はほぼ正確である。ただし、譯出されたのは冒頭の三章(「老者」「少年」「林醫」)のみで、主人公二人の幸福なる幼少年時代を描くところまで中絶している。

- (補註2) 本稿脱稿後、石評梅及び盧隱『象牙戒指』に現れたる『みずうみ』關連論文に吳福輝「中國『娜拉』反叛後的複雜心態」(『帶着枷鎖的笑』浙江文藝出版社、一九九一、所收)があることを知った。筆者と研究視角を異にするとはいへ、石評梅等をめぐる『みずうみ』受容問題を考察するに際し、それを中國におけるノラの運命と結びけるという吳氏の視點は筆者とも共通するものであり、たいへん啓發を受けた。

- [附記] 註(7)に關して注意とお願いがあります。雑誌『神泉』所載の『夢の湖』及び當該號の目次・奥付等のコピーは筆者が所持していますので、ご入用の方は筆者まで直接ご連絡下さい。これは岩波書店の業務に支障を來さぬための措置です。各位のご協力をお願い申し上げます。